



小宮豐隆監修  
荻野清校注  
大谷篤藏

# 校本芭蕉全集

第二卷 發句篇  
(下)

角川書店

校本 芭蕉全集  
第二卷

昭和三十八年十月十五日 初版發行

定價 九〇〇圓

校注者 荻野 大谷篤藏

發行者 角川源義

印刷者 中内あき子

製本者 鈴木俊一

發行所

株式會社

角川書店

東京都千代田區富士見町二ノ七  
原町口座 東京一九五二〇八番  
電話九段(331)〇二二(代表)

Printed in Japan

落丁・亂丁本はお取替へ致します

# 目次

発句篇(下)

凡例

元禄三年

元禄四年

元禄五年

元禄六年

元禄七年

年次不詳

存疑の部

誤伝の部

荻野  
大谷篤  
蔵校注

三

五

九

三〇

四〇

五〇

六〇

七〇

八〇

九〇

漢句・和歌・狂歌・鄙歌

漢句

和歌・狂歌・鄙歌

補注

索引

二五

二七

二九

三〇

三一

發句篇  
(下)

大萩  
谷野  
篤清  
藏校  
注



## 凡 例

一、本巻（発句篇下）には、元禄三年以後の製作にかかる芭蕉の発句、存疑句、誤伝句、および漢句、和歌・狂歌・鄙歌を収めた。

一、作品は製作順を考慮して配列した。ただし、年次不詳、存疑、誤伝の部は、初句の五十音順によって配列した。

一、年次を出典以上に確められないものは、出典書名に\*印を付して、その年次以前をも考慮すべきことを示した。出典書名は適宜略記したものもある。例えば『芭蕉庵小文庫』を『小文庫』、『芭蕉翁発句集諺解大全』を『諺解大全』など。

一、年次内でもなるべく製作順に並べようとしたが、それを推定し得る資料のないものについては、大体季題順あるいは出典の記載順を考慮して適宜配列した。

一、句のかかげ方は、成案形と思われるものをまずかかげ、初案その他と認められるものをその傍に付記した。

一、同句形のもの、漢字や仮名が相違する程度は考慮せず、再掲しないのを原則とするが、読み方の参考となる仮名書き、読解の参考となる前書などの場合には、再掲したものもある。

同句同形内では、なるべく早い出典を重んじ、写本は自筆物や板本より後に考えた。

一、句の前書・前文類の中、長文のもので、既刊の紀行俳文篇等に収録されているものは（前文略）として、これを省略した。ただし読解上必要と思われる場合は、この限りでない。

一、存疑の部は、芭蕉の作品とされていながらなお疑わしいもののかかげ、その中でも芭蕉の作品として確実性のあるものには、句頭に\*印を付して区別した。

一、誤伝の部は、他の人の作品で、芭蕉と誤り伝えられるもの（『新編芭蕉一代集』以前の出典について）をかかげた。明らかな偽書簡中にある句も、一旦芭蕉の作品とされたものを網羅する意味で、あえてこれを掲出した。

一、存疑・誤伝の部については底本の桃青・芭蕉等の作者名を、原則として省略した。

一、本文は片仮名・変体仮名を、特別の場合を除き、平仮名とした外、なるべく漢字・仮名遣は底本のままとした。ただし明らかに誤りと認められるものは、傍に（ ）として小活字で正字を示した。一般に難読と思われる漢字には平仮名のルビを付けたが、底本にあるものには（ママ）と傍記した。片仮名のルビはすべて底本のままである。また、句読点・濁点も補ったが、底本にもあるものには（ママ）と傍記した。なお送り仮名の不足はルビで補い、目次、凡例、頭・補注（引用の部分を除く）、索引は現行の漢字仮名遣によるのを原則とした。

一、巻末の索引は上下巻を通じて、本文に採録した句（ただし存疑・誤伝の部については句頭に\*印を付した句のみ）の、五十音順初句索引である。漢数字は句番号（ゴチック数字は上巻所収）を、頭に\*印を付した漢数字は所出の頁付けを示す。

一、上記の他はすべて上巻所載の凡例に準拠した。

一、元来本巻は故荻野清氏が担当され、既に編纂に着手されていた。そして故人の深い造詣と犀利周到な考証による本巻こそ、識者のひとしく期待するところであったが、不幸業半ばにして急逝された後を、大谷が引継いだものである。年次の決定、本位句形の決定、存疑とすべきものの選定は、少数の例外を除いて、荻野氏の遺したカードによったが、頭・補注欄に記した年次決定の理由、句解、句形の異同等はすべて後補者の責任によるものである。

故人の遺業をつぎ、本巻を編集するにあたって、今榮藏、石川眞弘両氏の助力を得たことを感謝する。

(大谷記)



六〇元 真蹟は『芭蕉図録』所収。膳所での吟。  
 『其俗』『泊船集』(前書)「京ちかき所に年をと  
 りて」『蕉菊句集』(「都ちかき所にとしを取  
 て」、中七「唯人」と誤る)『卯辰集』(「湖水  
 のほとりに春を迎へて」)『花摘』の其角文中  
 『かくれざと』の路通跋文中にも見える。『目  
 圓扇』にも所収。三年正月二日付荷兮宛・同  
 十七日付萬菊丸宛書簡にも載せ、同五日付式  
 ・槐市宛および四月十日付此筋・千川宛書  
 簡にはこの句に関する記事がある。『敏宮物  
 語』では冒頭の東藤の文中に見えるが誤伝。  
 『句選』の句形は『芭蕉翁消息集』所収正月廿  
 四日付北枝宛書簡にも見えるが、この書簡は  
 真偽不詳である。↓補注一。  
 六〇路通のみちのく旅行は同人撰の『俳諧勸  
 進帳』(元禄四年五月刊)その他から元禄三  
 年たること明らかである。同年四月十日付此  
 筋・千川宛芭蕉書簡に「路通正月三日立別其  
 後逢不<sub>レ</sub>申候」とあるが、恐らく路通は年初既  
 に奥羽旅行の計画があり、別れるに際してこ  
 の句を贈ったのであろう。底本(元禄十二年  
 刊)に出るのは、本書に路通が序を書いたこ  
 とと関係がある。「まことの華見」に、憂い  
 辛い旅の境涯に身をおいてこそ、花の真の風  
 趣がわかるとの芭蕉の考えがわかる。  
 六二底本の成立時期(元禄三年七月跋)から  
 同年春かそれ以前と見られるが、「その日其夜  
 の見聞の句々」(自序)を取めた同書が、四月  
 廿四日の条に載せているところから、当時所  
 報を得たものと考えられ、当春の作とする可  
 能性が最も強い。『蕉菊句集』に三年。『泊船  
 集書入』に「洒堂餞別」、『菊の道』には「膳  
 所へ行人の許にて」と前置する。類の祭は瀬

## 元禄三年 庚午(四十七歳)

元禄三元旦

みやこちかきあたりにとしをむかへて

こもをきてたれ人ゐます花のはる

(眞蹟)

孤をきて何國に御座花の陰

(敏宮物語)

たれ人かこも着ています花の春

(芭蕉句選)

路通がみちのくにおもむくに

くさまくらまことの華見しても来よ

翁

(茶のさうし)

膳所へゆく人に

瀬の祭見て来よ瀬田のおく

(花摘\*)

六二カハツ

が魚を捕って、河岸に並べるのをいう。普通初春一月頃をその季節とする。

六三 底本は元禄三年二月跋、同五月一日刊（阿誰軒『俳諧書籍目録』）なので、しばらくここに配列したが、作風よりすれば貞享初期又は天和頃の作とすべき可能性が多い。「鐘撞て花の香消ゆる夕かな」とあるべきを倒叙したので、「野風ッ吹て」（二五）の句などと同じく漢詩の手法によったもの。

六三 底本の成立時期からこの春もしくはそれ以前の作と推定される。『京羽二重』（元禄四年九月刊）にも「西洞院二条上ル町 京 芭蕉」として見える。『句解参考』の句形は誤伝であろう。

六四 土芳の『蕉翁全傳』元禄三年の条に「此句西島氏百歳子ノモトニテノ事也 二月六日歌仙一卷有」と注し、『何袋』に同日の前書ある九吟（乍木・百歳・村轍・式之・梅嶺・一桐・槐市・與雪の伊賀連中との）歌仙が出てゐる。『泊船集』（前書「椿」）『今日の昔』『蕉翁句集』『笠の影』に収める。一句は、落椿を、鶯が笠を落したものと観じた。「青柳を片糸によりて鶯のぬふてふ笠は梅の花笠」（古今集）等の、梅の花を鶯の笠と詠じた古歌が作者の頭にあったことは疑えないが、制作年次や『猿蓑』への採録からすれば、古典を基盤とした単なる見立てではなく、眼前の実景からの直観で、その直観の底辺にあったのが古典、と見るべきであろう。見立は延宝末期の風体。

六三  
鐘消て花の香は撞夕哉  
芭蕉（都曲）\*

六三  
物好や句はぬ草にとまる蝶  
好くや名もなき草にとまる蝶  
芭蕉（都曲）\*  
（芭蕉翁句解参考）

六三  
うぐひすの笠おとしたる椿哉  
芭蕉（猿蓑）

六五 元禄三年三月二日 伊賀上野風妻亭で興

行した八吟四十句の発句で、『俳人真蹟全集』

巻四にこの日付のある芭蕉風妻亭筆の懷紙が

見え、『雲虫庵小集』には十九句目以下異なる五

吟歌仙が見える。三月中下旬頃所に出た折

も、この句で三吟歌仙を興行し、『ひさご』

に「花見」と前書して収める。「花摘」や真

蹟の句形は、右の外「泊船集」「木の下」「古

今短冊集」等も同じ。「渡し船」の句形は

『浪花置火燵』『陸奥衛』や『三冊子』『蕉翁句

集』『蕉翁全傳』(土芳・竹人とも)にも共通

するが、すべて誤りと見られる。但し『全傳』

に風妻亭での作とするのは信ずることができ

る。真蹟の前書は謡曲・西行桜の文句。この

真蹟は『芭蕉図録』解説に川西氏蔵として紹

介するもの。原本には節付けを付す。

六六 土芳『全傳』元禄三年の条に『此句木白

興行ニ一折有、三月十一日荒木白髪(ママ)

|                                                                                  |                                                                                       |                                  |                                |                                                                           |                                                                                                                                                                    |
|----------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------|--------------------------------|---------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>六五<br/>木本<sup>もと</sup>に汁も膾<sup>なます</sup>も櫻<sup>も</sup>かな翁<sup>翁</sup>(花摘)</p> | <p>先<sup>まづ</sup>初花をいそぐなる近衛殿の糸櫻、<br/>見渡せば柳櫻をこきまぜて、都は<br/>春の錦榮爛<sup>にしきんらん</sup>たり</p> | <p>木のもとにしるも膾も櫻かな<br/>花見 (眞蹟)</p> | <p>木のもと汁も膾も櫻かな<br/>桃青(渡し船)</p> | <p>六六<br/>畑<sup>はたけ</sup>打音<sup>うちおと</sup>やあらしのさくら麻翁<sup>まお</sup>(花摘)</p> | <p>六七<br/>かげろふや柴<sup>さい</sup>胡<sup>こ</sup>の糸<sup>いと</sup>の薄<sup>うす</sup>曇<sup>ぐもり</sup><br/>かげろふや柴胡<sup>さいこ</sup>の原<sup>はら</sup>のうす曇<br/>芭蕉<sup>ばしやう</sup>(猿蓑)</p> |
|----------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------|--------------------------------|---------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

六七 『猿蓑』に出るので元禄三乃至四年春の  
作と推定されるが、『蕉翁句集』に三年とし、  
かつ土芳『全傳』でも三年伊賀滞在中の部に  
出すのを故ありと認めて、いまここに置く。

『泊船集』『蕉翁句集』は『猿蓑』の句形、『全  
傳』は『句選』の形で掲げる。『句選年考』

は「猿蓑に柴胡の糸と有り、原の書損にや」というが『猿蓑』を疑うことは妥当ではあるまい。柴胡は多年生の薬草。その細い芽立ちを糸といった。

六八 土芳『全傳』元禄三年の条に掲げ「此句ニテ橋木子ニテはいかい有」と注する。竹人『全傳』にも「橋木子の許 藤堂丹羽 歌仙一折」として同年の条に収める。『蕉翁句集』（前書「橋木子にて」）『句選拾遺』（前書「橋木亭にて 藤堂修理公ノ事トナン」）にも見える。橋木子は藤堂修理長定。千五百石。上野城内二の丸に屋敷があつた。土手には松が植わり、庭には桜がさいて、木深い立派な屋敷だとの挨拶。

六九 土芳『全傳』に元禄三年春の伊賀藩在中の条に掲げる。『蕉翁句集』にも同年の部に出し、『句選拾遺』には「当地」伊賀上野の（意）と頭注して収める。「豆の粉飯」は黄な粉をまぶした飯。土五は風狂の乞丐人である自分にはふさわしいことだの意。

三〇『祖の古畑』には此前書の下に次に出す二句を並べて出す。三草は茄子・唐辛子・種芋である。『己が光』所収の次々句の前書により三年作と推定される。兩『全傳』には『蕉翁句集』と同形を収め、三書とも四年作とするは誤り。土芳『全傳』に「此句百歳子ニかせん催サレシ時ノ句也、巻五句ニテ終ル」と注し、竹人『全傳』も略同じ旨を注する。このかみは兄半左衛門。↓補注二。

三三 元禄三年作（前注参照）。『かくれ里』（宝永五・六年刊）には巻頭に見える。中七「おもひこなす」は軽んじるの意。この小さな種が、やがて秋にはあの辛い実をつけるのだと思え

六八

土手の松花や木深き殿造り

（土蕉翁全傳）

六九

似あはしや豆の粉めしにさくら狩

（土蕉翁全傳）

三〇

ふる里このかみが園中に三草の種をと  
りて

春雨やふた葉にもゆる茄子種

はせを（祖の古畑）

こまか成雨や二葉のなすびだね

（蕉翁句集）

三三

此たねとおもひこなさじとうがらし

（祖の古畑）

ば、まんざら馬鹿にもできないと異じた句。  
 三 作年次は「午ノ年」(元禄三年)なる前書を信すべきである。『泊船集』以下、いずれも前書がない。『己が光』には以下半残・土芳・良品との四吟歌仙が収められるが、その一人の土芳の『蕉翁句集草稿』では『泊船集』の句形をとる。「此句に伊賀通中四吟哥仙あり。己光に出る。花のさかりに」と有。違也」とし、『蕉翁句集』でも同句形を取っている。土芳『全傳』には中七以下「花の盛にうりありく」と書いて「に」「り」の上に、それぞれ「を」「る」と太字で訂正している。この句形は最初案か杜撰か、にわかに断じがたいが、上五「いもだねや」の句形は、『祖の古畑』が真蹟によつたと見られるので、初案當時のものと考えられる。『根無草』にもその句形で見える。『芭蕉句選』には「種芋や花のさかりを売行て」とあるが、下五は杜撰。芋といえは名月の頃のものであるが、その種芋を花の盛りの頃に売り歩くのに異じた句。  
 三 真蹟(白字刷) 菊山当年男「はせを」所載に「この国花垣の庄は、そのかみならの八重桜の料に備へられ侍りけりとかや、ものにも書つたへられ侍れば」と前書して「元禄三」と識し、又土芳『蕉翁全傳』同年の条に次出の句と並べて「此二句ハ膳所ニ行トテ出ラレシ道ヨリモノニ書付テ半残方迄見セラレシナリ」とあり(竹人『全傳』も略同じ)、この年の作、花垣庄は上野市予野。名張への途中にあり、膳所へ行く途中時ではなく、上野滞留中にここに遊んだ折の作である。『泊船集』『宇陀法師』『蕉翁句集』に前書なしで見える。前書の話は『沙石集』に見える。

午ノ年伊賀の山中 さんちゅう

春興

種芋や花のさかりに賣ありく 翁 (己が光)

種芋や花のさかりを賣ありく (泊船集)

芋種や花の盛を賣ありく 芭蕉 (今日の昔)

いもだねや花の盛に賣ありく (祖の古畑)

芋種を花の盛をうりあるく (土蕉翁全傳)

一里はみな花守の子孫かや 芭蕉 (猿蓑)

一里はみな花守の子孫かや 芭蕉 (猿蓑)

三〇 底本の成立時期（三年七月跋）や『蕉翁全傳』の記事（前注参照）により元禄三年。底本には「うつくしきかはかく雉のけ爪かな（注・其角の句）」と申たれば」と前書するが、撰者其角の注記と見られる。類似の記事が『三冊子』にも見え、この句が其角の句に対して作られたことは確かであろう。『勸進帳』には「山居」と前書する。『小文庫』『陸奥衛』『泊船集』『蕉翁句集』には前書はない。三三 三月下旬頃膳所での作。一応四年春からの懸念もあるが、同年は正月初め大津に在っただけで、花の頃膳所に居た事実が認められない。この句形は『流川集』『今日の昔』にも見える。『泊船集』（前書「洒落堂の記略」）は『卯辰集』と同形。「白馬」の句文は芭蕉真蹟によると考えられるし、「には」だけで「鳩の海」（琵琶湖）の意に慣用されるので、「波」とする方が曲折もあって良い。『蕉翁句集』の洒堂は洒落堂の、潮は湖（二ホ）の誤記。底本に文（俳文篇四五一頁）あり、今略。三六 服部真蹟の年記や、村田真蹟（芭蕉園録）・菊本真蹟（同解説）に三六の句と併記すること等から年次が確められる。『堅田集』所収の真蹟には「元禄々々辛未」（四年）とあるが、これは翌年春夏の頃、人に望まれて書き与えたものか。真蹟は四種とも上五「行春」で、これが初案。『猿蓑』撰の頃までに改案されたであろう。改案形は『篇突』『泊船集』『目録扇』等に前書なしで見え、『蕉翁句集』は同じ前書で『蝶姿』と同句形を出す。句形は杜撰であらう。『堅田集』真蹟の前書は下掲真蹟と類似し、又村田真蹟には「四季折」の名残とところ／＼にわたりて、

三〇  
蛇くふときけばおそろし雉の聲 翁 （花摘）

三三  
洒落堂記

四方より花吹入てにほの波 はせを（白馬）

四方より花吹入て鳩の菰 翁 （卯辰集）

珍夕が洒堂

四方より花吹入て潮の波 （蕉翁句集）

三六  
望湖水惜春

行春を近江の人とおしみける 芭蕉（猿蓑）

行春をあふみの人とおしみけり 志賀辛崎に舟をうかべてひとく （蝶姿）

はるをおしみけるに

行春やあふみの人とおしみける はせを（服部氏藏）

元禄三